

生物多様性を保全する機能

－ 将来にわたり食料を作る働きの持続と、生きものを育てる働き －

農業を安定的に行うことで、農産物の植物遺伝資源が保全され、将来の食料生産機能を保つ働きがあります。また、農業が自然との調和の下で行われていることで、野生動物との共存関係ができあがり、多様な生物のすみかともなり、生物を保全する働きがあります。

「はまなか緑の回廊事業」(北海道浜中町)

平成19年度から牧草栽培に適さない原野・傾斜地などに植樹を行い、生きものの生育環境を森で結び、多様な生きものが生息できる環境の回復・保全を行っている。



「蕪栗沼ふゆみずたんぼ」(宮城県大崎市)

地域でまとまって冬の田んぼに水を張る「ふゆみずたんぼ」を行い、蕪栗沼をねぐらとしていたハクチョウやマガン等の渡り鳥が分散し、春には二ホンアカガエル、夏にはサギの群れなど生物多様性に貢献している。



「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」(佐渡市)

生きものを育む農法（江の設置、ふゆみずたんぼ、水田魚道の設置、ビオトープ）や生きものの調査を認証米の要件とし、生物量を増やしトキの餌場ともなる水田づくりを実施している。



「農事組合法人 ファーム宇賀荘」(島根県安来市)

水田に地域の特産のどじょうを放流し、無農薬・無化学肥料で水稻を栽培。また、雑草抑制の目的で冬期湛水を実施、毎年1,000羽を越えるコハクチョウが飛来・越冬するなど、一年を通して生きものと共生した米作りを行っている



田んぼの食物連鎖

水が張られた田んぼには、堆肥などの有機物を分解する微生物が繁殖。その微生物を小魚が食べ、その小魚を水鳥が食べる、そのような食物連鎖により、多くの生きものが集まり、つながって生きています。

